

忘れてくれるな帝国座を

－日本最初の宇宙SF劇から100年－

加藤賢一（一日芸能評論家、大阪市立科学館）

1. 2010年の私の夕陽

今年は残念なことにじっくり夕陽を眺める機会にも、またそうした心持ちに浸る時間にも恵まれず過ぎてしまった。このまま歳が暮れてしまうのか、とやや無念に感じていたところ、私の心を見透かしたかのように、素晴らしい夕陽の写真が届けられた。写真1をご覧ください。富士の高嶺に沈む夕陽である。なかなか撮ろうとして撮れるものではない。撮影者は平間武さん（神奈川県在住）。出張で近くに行き、たまたまものにしたという。携帯電話でパチリ、当世の技術は素晴らしい。おかげでしばし幸せな時間を過ごすことができた。

2. 帝国座

－日本最初の宇宙SF劇から100年

2010年は日本で最初に宇宙SF（科学空想物語）劇が公演されてから丁度100年だった。場所は大阪、北浜にあった帝国座である。「それがどうしたの？夕陽と何か関係があるの？」と思われるかもしれないが、そう言うなかれ！夕陽の沈む海の向こうからやってきた旋風のようなものだったのだから。

丁度100年前は明治43年、1910年である。日清、日露の戦争を経て、日本は富国強兵路線を歩んでいた。韓国併合が同じ明治43年であったことを想起すれば、およそ、状況が分るだろう。ヨーロッパでは間もなく第一次世界大戦（1914-1918）



写真1 山中湖名物・ダイヤモンド富士。撮影：平間さん



写真2 帝国座 (株)大林組のホームページより

に突入しようというところで、科学技術が急速な発展を見せていた。特にドイツは着々と準備を進め、その成果はやがて戦闘機、潜水艦、毒ガスなどの新兵器に結実していく。そんな時代の大阪である。工業化の波が押し寄せ、街は活気を呈していた。

そんな折、現在の三井住友銀行大阪本店の南側にレンガ作りのビルが出現する。翌年、東京に誕生する帝国劇場の向こうを張って川上音二郎(1864-1911)・貞奴(1871-1946)の二人が作った帝国座であった。これこそわが国最初の西洋式劇場であった。実は、川上は帝国劇場建設に絡んで出資もしていたから、てっきり役員に納まるはずだと思っていたところが、外されてしまった。客観的に見れば、渋沢栄一や大倉喜八郎などのような“正統的”経済人には、川上などはヤクザな人物にしか映らなかったはずだから、うなずける話ではある。そこで、川上は東京を捨て、大阪で帝国座をと考えた。もちろん、大阪に決めたのはそれに加え、伝統的演劇のメッ

カ東京に反し、工業都市大阪には進取の気風があり、自分を受け入れてくれる素地があると感じ取ったからではないかと、筆者は思っている。

6月の柿落としてはジュール・ヴェルヌ「80日間世界一周」の改作で、日本人福原が70日で世界を一周するという冒険譚だった。「なんと言う演目か！」と思われるかも知れないが、川上音二郎は新派の創設者とされているのだ。この流れを受けて、11月に上演したのが「星世界探検」。これこそわが国で最初の宇宙SF劇だった。黒岩涙香が訳したグリフィスの「新説破天荒」(原題は Star Worlds)に基づき、地球から飛び立った主人公が太陽系の惑星を巡り、そこに住む人々と友好を交わして帰ってくるという舞台が展開された。「観客が熱気球で宇宙を旅しているような感覚を与えるために、眩しいような照明効果を用いた。旅人たちは天使や長い耳をした月の住人や、赤い肌の色をした美しい火星の女性と出会う」ような演出だった(レズリー・ダウン著、マダム貞奴、集英社刊、2007、木村

英明訳)。そもそも、ヨーロッパ流の舞台照明を最初に導入したのも川上だったし、面目躍如たる舞台だったようだ。

とまあ、ここまではいいのだが、情けないことに、これ以上の情報を持ち合わせていないので詳細をお知らせすることができない。記念すべき日本で最初の宇宙SF劇なるものがどんなものだったか、いささか宇宙に関心を持つ者とすると詳しく知りたいところなのだが……。

さて、写真2をご覧いただきたい。帝国座外観である。画面の左右に電柱が写っていて、右の電柱にはたくさんの碍子が並んでいる。エジソンがニューヨークで配電事業を始めたのは1881年、大阪で初めて電灯が灯ったのは1886年だった（自家発電）。大阪電灯が配電を始めたのは1889年だから、100年前、一般市民に電気はまだ縁遠かったことだろう。そんな時代に電気による舞台照明だった。川上の思い入れが垣間見えるエピソードである。

このように花々しく開場した帝国座も、あっけなく最後を迎えてしまう。建設に際し、貞奴を通じて伊藤博文なども支援したようだが、建設費の大半は借金で賄われていた。それは彼らがいくら芝居で頑張っても、席料で賸えるような額ではなかった。開場翌年（1911年）、川上音二郎が47歳で生涯を閉じ（葬儀は一心寺で。帝国座から長い葬列が続いたと言う）、その後、貞奴はなおも頑張ったが、ついに1913年、川上の夢だった帝国座は彼らの手から離れていく（建物は1965年頃まで使われていた）。

明治の終りが目前に迫っていた。間もなくヨーロッパでは大戦の火花がはじけようとしていた。ドイツを初め欧米では来るべき戦争を睨んで、科学技術開発が急ピッチで進められていたし、日本でもそれに負けじと、政府の投資が増えていった。それによって大阪は工業都市としての

重要性を一層高め、大いに栄えていった。その象徴を帝国座と日本最初の宇宙SF劇に見ることが出来る—これが本稿で強調したかったことである。

3. 川上音二郎・貞奴の時代と西欧化の波

川上音二郎・貞奴の生涯は起伏に富んで、実に興味深い。特に、わが国最初の女優と言われる貞奴の人生は見事である。その、常人ではとても足元にも及ばぬ大活躍を紹介したいところだが、ここではしかるべき書物に譲ることにして、彼らと西欧との交流について簡単に触れておきたい。

川上は1899年の渡米に当り、「来年のパリ万博へ行くのだ、その途中、アメリカに寄った日本を代表する演劇集団である」旨の宣伝をしている。後者は完全に嘘だが、前者は本当だったようだ。川上は1893年、借金取りから逃れるかのようにドロンを決め込み、パリへ行っていた。そこで見たのが西欧の本格的な芝居であり、電気照明で、帰国すると、西欧の演劇を取り入れた新しい演劇を作るという触れ込みで、新派を名乗った。1899年の2回目の洋行に際し、パリ万博を意識していたのは間違いなからう。1900年6月にパリに入り、11月まで滞在していた。

このところ、わが国では博覧会は下火になってしまったが、かつては盛んに行われていた。近代社会になって世界がグローバル化すると、折節に博覧会が開かれ、時代を先取りした展示の数々は社会に大きなインパクトを与えてきた。大阪では現在の天王寺公園あたりが会場となったため、あの界隈をルナパークや新世界と呼ぶようになったことはよく知られている。博覧会は常に光に満ちた大イベントとして取り組まれてきたから、新しい物が好きな人たちの好奇心

をくすぐった。しかし、昨今は毎日が博覧会のようなもので、まとまってどっと成果を紹介するような博覧会スタイルは魅力を失っているかも知れない。

川上が渡米、渡欧を決意したのは、そこで演劇の需要があると踏んだからである。当時、アメリカには日本からの移民がサンフランシスコあたりに相当いたし、アメリカ興行を持ちかけた男もそうした移民の一人だった。それから、明治維新後、広く欧米に日本文化が紹介され、ある種の日本ブーム（もちろん、東洋の神秘ということ）になっていたことも手伝っていた。それは、ゴッホに代表される印象派と言われていた画家が浮世絵の影響を受けたことなどから推察されるだろう。川上一座がアメリカ大統領、イギリス皇太子の前で公演するに際しては現地

の大使が深く関与しており、西欧社会に日本をセールスするのに川上一座が使えると認められていたことがうかがえる。それにしても、彫刻家ロダンが貞奴の彫像を作りたいと申し出たり（時間がないと断ったらしい）、プッチーニがオペラ蝶々夫人の作曲の参考にするため貞奴に会いに行ったり、修行中のピカソが貞奴の宣伝ポスターをデザインするなど、当代の鬼才と交流していたのである。それは、彼らの魅力はもちろんのこと、東西の新たな文化交流の時代であったからこそではなかったかと思う。

三井住友銀行大阪本店の南東向いにあるビルの道路沿いに帝国座跡の小さな碑がある。低いので目に着きにくいですが、淀屋橋や肥後橋付近にお越しになる機会に一度ご覧いただきたい。